

領域指導法(人間関係)における探索的授業実践 (1)

— 子どもの人権意識を育てるスウェーデンの保育実践紹介と
グラフィックレコーディングのコラボレーション授業 —

丸目 満弓・吉澤 貴子・三宅 正太

〔論文〕

領域指導法（人間関係）における探索的授業実践（1）

—子どもの人権意識を育てるスウェーデンの保育実践紹介と グラフィックレコーディングのコラボレーション授業—

丸目 満弓・吉澤 貴子・三宅 正太

はじめに

本論は、大阪城南女子短期大学総合保育学科 2 年後期科目「領域指導法（人間関係・言葉）」のうち、筆者が担当する「人間関係」の授業において、2023 年 10 月 19 日に外部講師として「スウェーデンにおける保育実践」について授業を行った吉澤氏と、翌週 10 月 26 日の授業で「グラフィックレコーディング」^注を担当予定であった三宅氏が吉澤氏の授業内でコラボレーションを行うという探索的授業に関するふりかえりを対談形式にて行った記録である。

授業が実現した経緯として、授業時間の 1 時間目である 9:00～10:30、2 時間目の 10:30～12:15 はスウェーデン時間で 1:00～2:45、3:00～4:15 という真夜中であったため、当初より吉澤氏の授業は動画で行うものと決まっていた。そこに翌週の「グラフィックレコーディング」をテーマとした授業担当である三宅氏との打ち合わせの際、「吉澤氏の動画の傍ら、同時進行でグラフィックレコーディングを行うのはどうか」、という申し出があった。授業担当者の吉澤氏の意向を確認した上で、3 人でオンラインミーティングを行った結果、コラボレーションによる授業が実現することになった。そして授業後の 2023 年 11 月 11 日 16 時 30 分から 17 時 30 分に対談を行い、三者の視点から授業の実際、意義や課題についてふりかえりを行ったものである。

1 コラボレーション授業が成立したきっかけ

丸目：まずコラボ授業のきっかけですが、これは三宅先生とのグラフィックレコーディングの打ち合わせの中から出てきたアイデアだったと思います。提案してくださった意図についてお話しいただければと思います。

三宅：僕は結構シンプルに、グラフィックレコーディングを体験したことのない人にグラフィックレコーディングを教えるときに、単発での講座の 90 分で手法だけをお伝えするよりは、実際にグラフィックレコーディングの場面を見る体験をしていただいてから学ぶ方がいいのではないかとという発想が念頭にあり、ご提案させていただきました。

丸目：三宅先生のご提案を聞いたとき、私は別の意味で良いアイデアだと思いました。というのも、今回スウェーデンとの時差の関係で、動画にならざるを得なかった事情が私には大

きかったです。リアルタイムでスウェーデンからのオンライン授業であれば、多分実現しなかったと思いますが、学生の興味関心が動画に持ち続けられるかという不安は当初から持っていたのは確かです。思いもかけない三宅先生のご提案を聞いて、最初に考えたのは、授業の主体である吉澤先生はどう思うだろうかという心配はとてもありました。一旦相談してから考えようと思いました。

三宅：今回丸目先生から依頼の際に授業の意図を聞いていて、いろんな専門性を持っている人、現場の人の話を聞いてほしいという熱い想いを聞いていたので、複数の話題提供者がコラボできるならそれも良いのではないかなと思いました。おそらく授業の意図や全体の構成を聞いていなかったら、提案しなかったかもしれないですね。

2 コラボレーション授業の提案に対する授業主体者の受けとめ

丸目：その提案を聞かれたときの吉澤先生の受けとめをお聞きしたいと思います。さぞ驚かれたと思いますし、様々なご心配や不安があったと思います。

吉澤：はい。丸目先生からメールでいただいて、グラフィックレコーディング自体は私も知っていたのでそんなに違和感はなかったです。むしろ私の授業内容がどういうふうグラレコされるのかなと興味もありました。でもその反面、自分がその現場にいない状態で、グラレコをされることにとても不安が大きかったです。三宅先生が教室で書かれているときに、学生の視点はどこに行くかを考えると、動いている人に視点が移ると思うので、その授業の主体がどっちになるのかという不安と、学生がその三宅先生のグラレコを見て学ぶことが、三宅先生のフィルターを通した学びにならないかなというところに最初不安が大きく出てきましたね。

丸目：確かに、授業の主体が変わってしまうのではないかという懸念は私も感じていました。それから著作権のことも心配されていましたね。

吉澤：そうですね。インターネットなどのツールが発達していて、私がグラフィックレコーディングを目にするのは SNS 上で流れてくるものなので、私の講義が同じことにならないかという不安はありましたね。授業内容自体はオープンにされてもいいと思いますが、結局その先の使われ方について自分の手が及ばなくなってしまう不安は最初大きかったです。でも3人でのミーティングでその心配がないことが確認できました。またスクリーンで動画が流れて、三宅先生がどこでグラレコをするかなど、教室の状態や授業イメージがクリアになったことで様々な不安がなくなり、実現できたと思います。

3 3人のオンラインミーティング

丸目：3人でのミーティングのときに、吉澤先生の心配や不安を三宅先生が丁寧に答えてくださったことで解消できたと思うのですが、ミーティングの際に気をつけた点があれば教えてください。

三宅：僕のフィルター、バイアスがどうしてもかかるってところは今回だけではなく僕はいつも心配でした。しかも今回は「子ども支援」という共通項があり、近い分野にいるだけに自分の価値観も強く出てしまうことは予想できました。ある意味で吉澤先生が勝手に通訳されたら嫌だということをしてしまわないだろうか、というのが一番の不安でした。ミーティングで、どこをどんな風に描き留めたらいいかについて意思疎通がとれたのは大きな安心につながり、有難かったです。僕自身も今後気をつけていきたいと思わせてもらえました。あれは刺さった言葉ですね。

丸目：刺さった言葉について、少しご説明いただけますか。先ほど、いつもグラレコをするうえで三宅先生のフィルターやバイアスがかかることは心配であると言われましたが、普段はどう解消されていますか。

三宅：事前に依頼者とコミュニケーションをとっていますし、普段はグラレコをする際に話者が目の前にいるので、僕が間違っただけの部分であったり、話者が表現を変えてほしい部分が出てくればその場で確認ができたり、その場で修正することができます。今回のように時差があって確認できない状況でグラフィックレコーディングをしたことがなかったので、いつもより気をつけるべきだと思いました。他の現場だと、逆にそのフィルターを重宝してもらえるところもあります。ある意味では参加者の声の代弁として、むしろ意見が欲しいということを言われるので、フィルターを意識する部分と、ちゃんと原文をどこまでしっかり残せるかは現場ごとでバランスが変わるので、今回のように原文のままでお伝えすることが求められる場合は、少し緊張しましたね。

丸目：いつも事前に話者とコミュニケーションを取られているということでしたが、いつも以上に丁寧に確認されたことが伝わってきました。

4 授業主体者の動画作成とそこに込められた思い

丸目：ミーティングの場では吉澤先生の不安が解消されて、コラボ授業が決定し、吉澤先生の動画作成という流れになるわけですが、動画作成の中で伝えなかったこと、気をつけたこと、もしかするとグラレコを三宅先生がされることを想定した工夫などもありましたらお聞かせ下さい。

吉澤：はい。丸目先生から授業の依頼をいただいたときに、人間関係というキーワードでス

ウェーデンの保育を考えた時、子どもを権利の主体として捉える保育のあり方はすごく一番伝えたいところでした。そしてその保育を支えているものとして子どもの権利条約が保育者の中でしっかり行き渡っている点が大きいと思います。さらに私が授業で一番伝えなかったことは、子どもが自分の年齢に応じて意見が主張できるようになることを保育士が育てているところを特に取り上げたいなと思いました。

ただ人権と言われても、日本人にとって人権は「知っているけど遠い存在」だと思います。ただ私がスウェーデンの保育現場で働いて、とても大事なことだと思ったので、それを学生がいま完全に理解ができなくても、保育現場に出たときに「そういえば何か授業で聞いた」という程度でもいいので記憶に残る話ができたらと思って動画を作りました。そして3人での打ち合わせで決めたとおり「授業動画の前半はファクト（事実）の部分としてグラレコを行わない部分、後半は保育実践の紹介としてグラレコでイメージを膨らませてもらえる部分とを分けて、グラレコと授業動画がうまく融合できるように想定して作りました。

丸目：今すぐに保育実践に取り入れるというよりも、人権の捉え方、保育実践にどう反映させるかについては種を蒔くような気持ちで、追々考えられるようになってほしいという気持ちで動画を作られたということですね。

吉澤：そうですね。日本の小学生、中学生の子どもたちに「意見を言いましょう」と言っても意見を言うことができないと聞いたことがあります。一方スウェーデンの子どもたちはどんな年齢の子どもでも自分の意見を言いますが、子どものときから「言える」環境が身近にあるからではないかと思ったので、その点について保育者をめざす学生にどうしても伝えなかったですね。



図1 保育場面における「民主主義の場」であるサムリング（授業動画より）



図2 吉澤氏によるサムリングの保育実践

5 グラレコを行ううえでの工夫や配慮

丸目：一方で授業動画をグラレコする三宅先生が、どのように授業に望んだかをお聞かせいただけたらと思います。

三宅：はい。事前に授業動画はいただいていたのですが、事前に全部内容を知って、構成を考えてきれいに出来上がったものをグラレコするのはライブ感がなくなるし、きれいにノートテイキングしただけになってしまうので、申し訳ないのですが2倍速で流れだけ確認するだけに留めました。そのうえで実際に教室を見て、書く内容を模造紙1枚におさめよう判断しました。

丸目：1枚で書こうと思われた理由は何ですか。

三宅：今回は黒板に向かって書く状況だったことと、この1枚を見るだけで今日の授業が分かるという、後の使い方もイメージしながら判断しました。2枚に書いたり、違う場所で書いたらもっと伸び伸びと余白を多めにとって書けたのですが、環境要因に左右されますね。

丸目：その環境要因の一つには、おそらく教室右側のモニターに吉澤先生の写っているプロジェクターがあったことへの配慮があったのではないかと思います。

三宅：もし2枚目を書くと、貼り替えの時に音が発生します。モニターから出ている授業動画の音と、その場で発生する音ではインパクトがあるのはその場の音なので、学生の集中がそれたり、モニターから視点を動かさないために1枚で書く判断をしたということが大きいです。

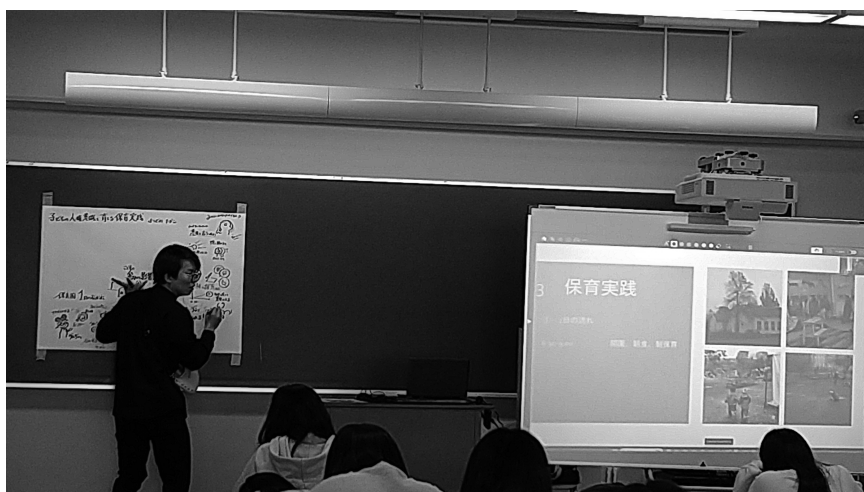


図3 授業動画が写るモニターの横でグラレコを行う三宅氏

6 当日の授業の様子について

三宅：学生の反応としては、前半は一番後ろの席でメモをしながら、どんなふうに授業動画を聞いているかを見ながら、後半は黒板のところでグラレコを書いていました。1 限、2 限と朝が早かったうえ、前の日がバイトだった学生もいたと思います。モニターから聞こえる授業動画のボリューム、教室の明るさからすると、全員が熱心に聞いているかというところ、そうとは言えなかったところもあったかと思います。でもワークの課題を Google フォームに記入している姿や、最後のフィードバックの時間の様子を見て、学生は授業に取り組んでいました。環境的に学びの得にくい状況だった中でも学生なりの反応があり、授業の手応えがなかったとは思いませんでした。

さらに授業後のふりかえりを見ても学生には伝わっていると感じました。先ほどの吉澤先生の「種をまく」という感じで、学生にとって、何かしら心に残る部分があり、頭の片隅に今日の授業が残ればいいし、授業目標の最低ラインには到達したと感じます。

吉澤：私は授業場面の録画よりも学生のふりかえりから読みました。しっかり書けていると思いました。ただ最後のワークで子どもの権利条約に書かれていることを実際の保育場面はどう実現するかについて質問しましたが、そこはうまく伝わっていないと感じました。

ワークの意図が伝わらなかったのか私の伝え方が悪かったのか、それはよく分かりません。授業場面の録画を見て、学生はもっと三宅先生の方を見てののかなと予想していましたが、動画を見る限りはそこまではなかったです。三宅先生が私のことを配慮していただきつつ、グラレコをされていて、その点がうまく調整ができた感じが伝わってきました。

丸目：そうですね。いい意味での予想が裏切られたなと思っています。当初の心配は目の前の三

宅先生に視点が移ってしまっていて、授業動画よりも模造紙を見ていると思っていましたが、三宅先生が音を立てないなど工夫していた点が大きかったと思います。

吉澤：海外の保育のことが学べて良かったという意見が多かったです。日本の保育を知るうえで海外との比較は大事な視点なので、保育現場に出る前に話ができてとても良かったです。印象に残っているのは、自分の意見を言うのがもともと苦手な子どももいるのではないかという意見で、確かにそういう子どもはスウェーデンにもいて、その子なりの発信の仕方を受け止めていく保育者の姿勢を伝えたかったなと思いました。

三宅：授業の中でのワークでの課題として出された「保育活動を考える」ことは、僕は実際にいろんな子どもと出会わないと分からないと思うので、保育現場に出る前にそのことを考えるのは高度ではないかと思いながら見ていました。さらにインプットしたばかりの情報で保育活動を考えるのは個人ワークだけだと難しいので、グループワークで保育活動を考えてみると違う形になったのかもしれないと思いながら見ていました。

吉澤：なるほど。そうかもしれないですね。

丸目：スウェーデンと日本の保育の違い、さらに子どもの権利について考えたことすらなかったという意見が複数聞けたことや、「権利は理解できた、次にどう実践に移すか」という一段難しいところをスウェーデンの保育を通して教えてもらえたことが大きかったと感じました。

三宅：北欧の方が保育先進国というイメージで、つい何でも良く見えますけど、日本の保育の良いところ、どこが一緒にどこが異なるのかという問いを最初から提示しておく結構おもしろいかもしれないですね。

丸目：複数の学生が自由記述でグラレコのことについて書いていまして、最後にグラレコがあることで、難しい内容をわかりやすく説明をさせていただいた。だから興味が湧いたという記述がありました。

吉澤：グラレコが授業動画を補完するものとして機能していた表れなのかなと感じましたね。



図4 授業内で書かれたグラフィックレコーディングの写真

7 授業後の二人の学生との出会い

三宅：授業後、個別に話にきてくれた二人の学生がいましたが、しっかり伝わっている学生がいることに心を動かされました。この授業は面白いし、大切なことが学べるという言葉に、熱量の高さを感じました。さらにこの大学で何が一番学びになったかという話をしていて、授業の中だけでは完結しない先生との関係性や、相互のコミュニケーションが素敵だと学生との会話で感じました。

丸目：話しに来た学生は日本の保育が全てではないという広い視点を持った学生だったので、吉澤先生の授業を聞いたことや三宅先生と話したことで海外への思いを一層強く持ったことが伝わってきました。そういう意味で今回のコラボ授業に改めて大きな意味を感じました。

8 課題と展望

吉澤：その場にいない動画は独りよがりになりやすいので、事前の打ち合わせで学生の現状に合わせた内容にできると良かったと思います。もし次回も授業動画とグラレコのコラボ授業が実現するなら、もっとねらいを明確にしたり、易しく分かりやすい説明にできたりすることが可能だと思います。それが今後の展望ですね。グラレコを授業のリアリティをもたせるために補完として併用するのは面白いと思います。こういうコラボ授業が他大学でも一般的になったら良いと思いました。

三宅：この3人でベストを尽くした結果が今回の授業だと思います。次回に向けて、スウェーデンと日本の保育を比較して同じ点や違う点を掘り下げてみたいという課題は一つ見えたのでとても面白かったです。実は吉澤先生の話聞いて、すごく刺激を受けました。

日本でも子どもの参加はよく聞きますが、影響力というキーワードは聞かなかったもので、「子どもの参加と影響力」を真ん中に置こう、と思ってグラレコをしました。今まで自分の活動を通して見聞きしてきたことと、「影響力」が1本の筋に繋がりました。

吉澤：一番言いたかったことを捉えてくださって嬉しかったです。確かに「参加」は分かりやすいですが、「影響力」について説明しても、うまく話すのが難しい部分ではありますね。でもこれから日本も深めていかないといけないところを、三宅先生の心に響いたとお聞きして、大切な部分がより鮮明になりました。

三宅：保育の場こそ民主主義、デモクラシーの土台の大事な部分ということが分かった感じです。

丸目：対談の最初に、グラレコは「参加者の声の代弁」としての役割が求められているという話がありました。まさにいまの話で三宅先生のフィルターを通した解釈が、吉澤先生の捉え直しに繋がった感じがしました。

吉澤：普通のリスナーとは違う、俯瞰の視点で記録をされているので、グラレコを依頼する方が

「参加者の声の代弁」を三宅先生に求める意味がすごく体感できましたね。次回もコラボ授業があるとするなら、私が 10 出さなくても、私は 8 ぐらい出したら三宅先生が補完してくれるだろうというお互いの信頼感ができていると思うので、次回はステップアップがあると思います。

9 まとめ～対談を終えて～

今回のコラボ授業が成立したのは偶然であり、「グラレコが授業動画の補完になる」、「グラレコを教える前に、実際にグラレコを行っている様子を見せたい」、「グラレコとのコラボ授業は興味深いが不安はある」と 3 人の思惑はそれぞれ異なっていた。授業主体者である吉澤氏にとっては、グラレコの作品は誰に所属するのかという疑問や SNS 上での流出に関する懸念、また吉澤氏が本来学生に伝えたい内容がグラレコを行う三宅氏のフィルターを通したものになるのではないか、という不安があったものの、事前のミーティングで丁寧に話し合い、それらの不安や問題点をクリアにできたことが実現につながった。

そしてグラレコを想定した授業動画の作成や授業動画を主軸においたグラレコという相互に配慮し合った授業づくりの結果、当日の授業はスムーズに行われ、授業後のふりかえり等から学生の理解促進にもつながったことが確認された。

さらにグラレコを通した三宅氏の「子どもの参加と影響力」という授業のメインテーマに対する解釈は、授業主体者である吉澤氏自身の捉え直しにもつながり、担当者相互の刺激という想定外の効果が見られるなど、授業を補完するグラレコの有用性、さらに授業の発展につながる可能性が示唆された。

注：会話中において「グラフィックレコーディング」については「グラレコ」と表現されていることもあるが、いずれも同義である。

参考文献

UNICEF（2022）子どもの権利条約，<https://www.unicef.or.jp/kodomo/kenri/>
（2023 年 11 月 27 日確認）

エリサベス・アルネール，ソルヴェイ・ソーレマン著 伊集守直・光橋翠訳，幼児から民主主義
スウェーデンの保育実践に学ぶ，かがわ出版，2021

本研究は大阪城南女子短期大学個人研究費の助成を受けて行った研究成果の一部である。

（まるめ まゆみ：准教授）

（よしざわ たかこ：Kulturförskolan Smedby Barnskötare）

（みやけ しょうた：特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば 職員）